

風の道

2025 Spring
vol. 40

TOPICS

病院長あいさつ 看護部長あいさつ

- 診療科のご紹介
- 部門のご紹介
- ヘルシーレシピ
- 東部トピックス



バックナンバーはこちら



※ 写真上段：令和7年度採用看護師
※ 写真下段：「運転外来」開設に関する記者会見および内覧会の様子

東部医療センターは躍進し続けます

令和7年4月1日付けで、病院長に就任いたしました林祐太郎と申します。直近まで名古屋市立大学大学院医学研究科で小児泌尿器科学分野の教授、名古屋市立大学病院で経営管理・戦略企画担当の副病院長を務めておりました。大手信之前病院長の後任として、市民の皆さまの健康と生命を守ることをめざして一生懸命努力する所存です。どうかよろしくお願い申し上げます。

私は昭和60年に名古屋市立大学を卒業しそのまま名市大病院の泌尿器科で研修をしました。昭和61年から名古屋市立東市民病院に泌尿器科医師として赴任しました。内科や外科などの他科の先生方や中央放射線部などスタッフの方々から、勤務時間内は医療人として、退職後には社会人として育てていただきました。当院は現在、名古屋市立大学医学部附属東部医療センターになりましたが、約35年の月日を経て、私の医師人生のスタートとなった当院に再び奉職することができるのは望外の喜びです。

それでは東部医療センターの診療の4つの柱をご説明いたします。



病院長 林祐太郎

1 地域医療支援病院としての役割を果たす

地域のクリニック・病院と密に連携し、救急患者・重症患者の受け入れを迅速に行うのが当院の役割です。回復後は再び地域の医療機関に患者さんを逆紹介申し上げ、地域循環型の医療システムをより強固に構築して参ります。これが市民の皆様へのより良い医療サービス提供につながると確信しています。

2 救命救急センターの充実

当院は救命救急センターとして、心臓血管や脳血管の重症疾患の患者や、小児救急患者を受け入れ、地域救急医療に貢献して参りました。医師・看護師の大幅な増員によって時間外における緊急手術や緊急カテーテル治療を、複数件、平行して実施することが可能な状態となっています。これにより直ちに命に関わる心筋梗塞、動脈解離、脳卒中等に対する夜間診療体制が大幅に改善しました。救急医療において市民の皆様への心の支えになることが東部医療センターの使命と考えます。救急車受入台数は大学病院化前の年間7,000件弱から昨年度は8,050件となりました。



ドクターヘリの受け入れも行って参ります

3 第二種感染症指定医療機関として

当院の重要な特徴である感染症医療では、新型コロナウイルス感染のなかで、名古屋市民の生命を守る中心的役割を果たしました。歴史が語るように、感染症パンデミックはまた必ずやって来ます。そのような新興感染症へのキー対策として、感染症学分野を設置し、感染症の専門医を養成していきます。

4 愛知県がん診療拠点病院をめざして

合併症の多い高齢者の皆さまのがん治療の中心的医療機関となるべく、多くのがん専門医や薬剤師を教授として招聘し、がん診療体制の充実・強化を本格的に進めています。とくに消化器外科、産婦人科、泌尿器科が手術用ロボットである「da Vinci Xi」を用いて積極的にがん手術を行っています。その結果、昨年度ロボット1台当たりの手術件数は、全国でもトップクラスの実績となりました。さらに、愛知県のがん診療拠点病院の指定獲得をめざして、無菌室を整備したうえでの白血病治療や、がん化学療法や放射線療法を含めた総合的ながん医療を進めています。

東部医療センターは地域の医療機関と密接に連携し、名古屋市民の皆さまに高度で安全な医療を提供し、患者さんから愛され慕われる病院をめざしていきたくと存じます。どうか今後ともご指導・ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

看護部長就任のご挨拶

令和7年4月1日付けで、看護部長に就任いたしました小塚亜矢と申します。まずは、皆様の日頃のご支援とご協力に対し、心より感謝申し上げます。

私は看護師として、東部医療センターで25年間を過ごしてきました。この間、社会や地域から求められるものに応じられる様、当院は病院機能や役割を変遷してきました。その中で、看護に求められるものも変化しています。就任にあたりまして、現在看護部が力を入れている取り組みについてご紹介させていただきます。

まずは入院部門です。以前の看護師はナースステーションで記録などを行い、患者さんからのナースコールで病室にお伺いしていました。しかし、中には遠慮の気持ちからナースコールをためらう患者さんがいる状況がありました。この状況を見直し看護師の動きや働く環境を改善したところ、看護師がナースステーションで過ごす時間が少なくなり、病室で過ごす時間が増えました。このことによって、転ぶ前に患者さんを支えることができたり、安静にしていた患者さんのリハビリが進むという効果がみられています。ナースコールでお知らせしていただくより前に患者さんが望むことを看護師が側にいることで感じることができ(患者さんが伝える前に、看護師が気付く点から「先取り看護」と言われています)、よりじっくり患者さんのお話しをお聴きすることを目指しています。特に当院の様な急性期病院では、入院後様々な説明や治療がなされます。近くにいる看護師に気軽に尋ねることで、患者さんに安心して治療を受けていただきたいと思えます。



看護部長 小塚 亜矢

次は外来部門です。国全体で入院期間を短くする動きの中、東部医療センターでも入院期間は短くなっています。治療をして早く住み慣れたところに帰られることはよいことですが、入院前と事情が異なりご不便を感じる場合もあります。外来では退院後のはじめての受診の際に看護師がお話しをお聞きし、退院後のお困り事はないか、入院中に説明した内容をご自宅でも続けられているか確認しています。困っている事については関係者に連絡をとり、解決できるように調整しています。患者さんの健康に対する不安を軽減し、望む生活様式を長く続けられることを目指しています。

以上の様に、看護部では救急医療を担う病院の中で、入院から退院、退院後の患者さんの療養生活を看護の力で支えるという自覚を持ち、取り組んでおります。

最後に、地域の皆様との信頼関係を築き、皆さまの健康とくらしを守るという使命を共有しながら、日々の業務に取り組んでまいります。皆様のご支援とご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



患者さんに寄り添う看護



多職種の関係者と共に患者さんを支える

消化器外科

低侵襲手術からメスの限界まで

東部医療センターは感染と救急に注力してきた歴史があります。これに加えて現在は、がん医療も軸として発展することに尽力しております。この方針のもと、消化器外科も新たな体制を発足し、皆さまのニーズに応じております。

① 専門性の高い消化器外科スタッフ

2025年4月現在、東部医療センターの消化器外科には、10名のスタッフが従事しております。食道外科専門医1名、肝胆膵高度技能専門医1名、内視鏡技術認定医4名、ロボット手術有資格者9名と、すべての消化器疾患に専門性をもって対応できる布陣であることは当院の大きな特徴の一つです。



消化器外科スタッフ

副院長

教授 松尾 洋一



② 患者様に優しい低侵襲手術（腹腔鏡手術からロボット手術へ）

当院では、腹腔鏡手術をはじめとする低侵襲手術を早くから提供してまいりました。ロボット支援手術システムである“ダヴィンチ”導入後は、積極的にロボット手術を行っております。すべての胃がんや大腸がん手術が適応であり、2025年からは、あらたに脾切除術にも導入しています。

③ メスの限界まで

（集学的治療と積極的な根治手術）

手術ができないような進行がんに対しては、化学療法や放射線治療を手術前後に組みあわせることによってがんの根治を目指します（集学的治療といいます）。内科や放射線科とチームを立ち上げ、私たちもメスの限界まで挑む“あきらめない外科”を目指しています。



ダヴィンチ手術 コンソール（操作部）と実際の手術画像

④ 炎症から腫瘍まで

（すべての消化器疾患に対応できる外科）

一般に外科では“がんの手術”を行うことが多いですが、当院では感染と救急に力を入れてきた歴史を踏まえ、炎症性疾患に対する外科治療も行っております。たとえば慢性膵炎の外科治療を積極的に行う施設は多くはありませんが、当院では内科との連携のもと、その成績は全国でもトップクラスです。逆流性食道炎や炎症性腸疾患に対する外科治療の経験が多いのも特徴です。

⑤ 教育と研究

大学病院として、当院では次世代の消化器外科医の育成にも力を入れております。消化器外科医を目指す若いドクターに対して、シミュレーションを用いたロボット支援手術のトレーニングなどを行い、その普及を行っております。今回お話ししてきた取り組みと成果は、国内外の学会で発信しております。



全国学会（消化器外科学会大会）での発表



若手医師を対象とした、ダヴィンチを用いたロボット手術トレーニング

これからも患者様および地域の医療施設の皆様に安心して選ばれる医療を提供してまいります。今後ともよろしくご協力申し上げます。

セカンドオピニオン外来のご紹介



当院以外の医療機関で診療中の患者さんが、これからの治療方法を自ら選択・決定することの支えとなることを目的として、セカンドオピニオン外来を設置しています。

詳しくはこちらからご確認ください。



中央放射線部

最先端の放射線技術で、患者さんへ最適な医療を提供

中央放射線部は放射線診断科部長を筆頭に、診療放射線技師36名で運営しています。女性技師は11名在籍しており、女性にも優しい医療を提供しています。当部門は、画像技術係と治療・核医学技術係に分かれ、医師、看護師、受付職員と共にチーム医療の一員として責任を持って業務に取り組んでいます。当院は「救急」、「がん」に力を入れており、これらを放射線検査、放射線治療の面からサポートする体制を整えています。また、近年進歩し続ける技術や多様化する専門性に対応して、専門資格取得や研究発表に取り組んでいます。

当院には、最新技術を備えたCT、MRI、RI装置を導入し、地域医療機関と病診連携推進を図っています。特にMRIの件数は急増し、需要に対応すべく、令和7年秋に3T（テスラ）MRIを増設し、連携体制をより強化する予定です。CT装置は2管球CTで、頭から足先までを約4秒で撮影できる高速撮影やDualEnergy撮影が可能です。特性を活かし、動きが大きい心臓等の撮影も可能です。MRI装置はAI技術を搭載しており、放射線被ばくがなく、造影剤を使用しない血管描出やMRCPといった撮像も可能です。RI装置は、近年、認知症治療薬が開発された背景もあり、診断に有用な脳血流検査数が増加傾向にあります。地域の医療機関の先生方から、これらの画像診断検査のご依頼があれば、画像検査実施後、放射線診断専門医による画像診断報告書を速やかにお渡しできる体制を整えております。是非ご利用ください。

放射線治療は、体表面画像誘導放射線治療（SGRT）、呼吸性移動対策が可能な放射線治療装置（リニアック）を導入しています。これらの技術により従来の治療法と比較し、副作用を減少することが可能です。放射線治療専門医や医学物理士、看護師も常駐しており、強度変調放射線治療や定位放射線治療といった高精度放射線にも対応しています。通院での治療にも対応しており、患者さんの意向に沿った治療法を、ライフスタイルに合わせて提案しています。

上記装置の他にも、外科的手術とIVRを組み合わせたハイブリッド手術用血管造影装置やIVR-CT、心臓用血管造影装置、マンモグラフィー装置、骨密度測定装置等、最新の装置を導入しており、幅広く検査・治療に対応しています。当部門は、これら放射線機器の性能を十分に活かし、質の高い医療を提供すると共に、検査・治療される患者様が安心できるような対応を心がけています。



IVR-CT



3T（テスラ）MRI



高精度放射線治療装置（リニアック）

がん相談支援センターのご紹介



令和6年4月に開設。患者さんやご家族のほか、地域の方々などなたでも無料でご利用可能です。

相談に関する各種情報は、こちらからご確認ください。



1/10
金曜日

新型インフルエンザに備えた訓練実施

新型インフルエンザの発生に備えた実践的な訓練を、名古屋市と合同で実施しました。新型コロナウイルス感染症の流行もあり、5年ぶりの開催となりました。東部医療センターでは、新型インフルエンザ疑い患者の受け入れ、診察、検体採取等を行いました。さまざまな課題が見つかり、有意義な訓練となりました。第二種感染症指定医療機関として、感染症危機に対して平時からの備えの重要性を改めて実感する機会となりました。



アイソレーターで隔離された患者を受け入れる様子

2/26
水曜日

「第172回 市民健康講座」を実施

令和7年2月26日に第172回市民健康講座「心不全に備える：知って守るあなたの心臓」（当院循環器内科診療科部長和田靖明教授）を開催しました。参加者は60代から80代の方が多く、身近な話題ということもあり、皆さん興味深く聞かれていました。質疑応答も有意義なものとなりました。

令和7年度は4回開催（5月、8月、11月、2月）の予定です。ぜひ気軽にご参加ください。



講師の和田教授



会場の様子

2/7
金曜日

病院機能評価の認定およびWorld's Best Hospitals 2025に選出

病院機能評価は、日本医療機能評価機構が実施する第三者評価であり、一定水準を満たしていると認定されます。当院では平成16年9月27日に初回の認定がされ、令和7年2月7日に5回目となる更新認定がされました。

また、アメリカを代表する週刊誌「Newsweek」が、毎年発表している「World's Best Hospitals 2025」日本版において、156位（市内6位）選出されました。

今後も引き続き、地域医療機関との連携を密にし、より質の高い高度・専門医療を市民の皆さまに提供できるよう、機能強化を図ってまいります。



機能評価の認定証と「World's Best Hospitals 2025」のロゴ

3/10~14
月~金曜日

世界緑内障週間「ライトアップinグリーン運動」に今年も参加しました！

緑内障は日本の失明原因第1位ですが、早期発見と治療継続で失明リスクは大きく下がります。啓発活動として、世界緑内障週間には「40歳を過ぎたら眼の定期検診を！」の呼びかけとともに、全国の施設が緑色にライトアップされます。

当院も今年3月10日から14日まで参加しました。

また4月からは、緑内障など視野障害のある方を対象とした「運転外来」が、眼科に開設されます。今後も一人でも多くの方の視力を守るため、啓発活動や診療体制の充実に力を注いでまいります。



ライトアップinグリーン運動の様子



ドライビングシミュレータ

4/4
金曜日

「運転外来」開設に関する記者会見および内覧会を行いました

「運転外来」開設に関する記者会見および内覧会を行いました。

東部医療センター眼科では、一般財団法人トヨタ・モビリティ基金ならびに「視覚障害者の安全運転支援プロジェクト」のご支援を受け、2025年4月1日に『運転外来』を開設いたしました。本外来は、全国で4か所目、東海地方では初の設置となります。

4月4日には、開設に伴い記者会見を開催いたしました。当日は、林祐太郎新病院長よりご挨拶をいただくとともに、「運転外来」の第一人者である西葛西・井上眼科病院副院長の國松志保先生にもご同席いただき、外来の目的やドライビングシミュレータの機能についてご説明いただきました。

「運転外来」では、両眼に視野異常のある方を対象に、視線計測機能を搭載したドライビングシミュレータを用いて運転能力の評価を行います。視野に異常があっても自覚症状のないまま運転を継続している方も少なくない現状をふまえ、ご自身の視野と運転能力の関係を正しく理解し、安全な運転に活かしていただくことを最大の目的としています。

記者会見では、来場された報道関係者の皆様にも、実際にシミュレータを体験していただきました。開設以来、運転外来には近隣医療機関に加え、県内各地からもご紹介をいただいております。東部医療センター眼科スタッフ一同、気を引き締めて本事業に取り組んでまいります。



取材の様子(左から、西葛西・井上眼科病院 國松志保先生、当院 林祐太郎病院長、野崎実穂眼科部長)



栄養管理料理

ヘルシーレシピ



冷凍むき枝豆を使用した
低糖質・高たんぱくのスープです。

夏は冷たく、冬は温かくして
お召し上がりいただけます。



作り方

- ① 枝豆は解凍し、薄皮を剥く。玉ねぎは薄切りにしておく。
 - ② 鍋にバターを熱し、玉ねぎを加えしんなりするまで中火で炒める。
 - ③ ②に水、コンソメを加え、中火で3分ほど煮たら、火からおろし粗熱をとる。
 - ④ ③をミキサーにかけ、粒が見えなくなってきたら牛乳を加え、滑らかになるまで攪拌する。
 - ⑤ ④をボウルに移し塩コショウで味を調えたら、ラップをして冷蔵庫で30分ほど冷やす。
- ※バターはオリーブオイル、牛乳は豆乳でも代用できます。

枝豆の冷製スープ

1食あたりの
栄養価 (1人分) **215kcal**

たんぱく質……10.5g 炭水化物……13.8g
脂質……11.5g 塩分……0.2g

材 料 (2人分)

冷凍むき枝豆 …………… 150g
 玉ねぎ …………… 40g
 バター …………… 5g
 水 …………… 50ml
 顆粒コンソメ …………… 小さじ1/2
 牛乳 …………… 200ml
 塩コショウ …………… 少々

お酒のつまみになる枝豆。
 「ナイアシン」というアミノ酸
 がビタミンB1、ビタミンCと
 ともに肝臓の働きを助け、二日酔いの予防に
 効果を発揮します。



あじさい基金について

当院では、広く寄附のご協力を仰ぎ、診療研究、人材育成及び医療環境の充実を図ることを目的として「あじさい基金」を設置しております。また、その成果を通じて地域の中核病院としての役割を果たして参りたいと考えております。皆様方のお力添えを賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

詳しくは
こちらから



名古屋市立大学
医学部 附属

東部医療センター

発行者／名古屋市立大学医学部附属東部医療センター広報委員会
〒464-8547 愛知県名古屋市千種区若水一丁目2番23号
TEL 052-721-7171 (代表)

東部医療センター

検索

<https://w3hosp.med.nagoya-cu.ac.jp/toubu/>

